

A: 百手祭(1月20日の祭り)について

百手祭は、神前で、弓で的を射って悪魔祓い・厄祓いや年占いをする祭りで、中国・四国地方で広く見られる神事です。

百手祭の由来は、文字の通り百手(100×2【手の本数が2】【二手は4本になります】)200本の弓矢を射る年始における御弓始めの儀式からきています。

儀式としては、地区の神社の境内に注連縄を張り、祭壇を備え、正面に藁で作った丸い輪の的を掛け、中央に大きな紙張りの的を置き、裏に【鬼】と書いた紙を貼り付けておきます。

【鬼】という字には甲・乙・ム(こう・おつ・む【無しの意味】)の3文字を謎字した字を書きます。甲乙つけ難しの意味で

鬼退治・悪魔祓いの他に「年の初めから争いごとは無し」という含みをもっています。

的は、射場から約10m(5間)【昔は約20m(10間)】位の位置におき、心身を清めた射手はこれを射的に、

無病息災・厄除け・福を招く・五穀豊穡を祈願して弓を引きます。

最後に寒い季節ですので、お神酒として、境内の焚き火で温めた「とっほ酒」(孟宗竹で燻つけた酒)を、

青竹で作った猪口にいれ、参拝者に振舞っている地区もあります。

歴史的価値を重んじる神社や、格式の高い神社では、このようなことが存続できますが、

現在では、地区の家々が輪番で、祭りの世話役に当たり、氏神の拝殿や、当番宅で村中寄り合い、矢だけを地区の件数分り、神に供え祀った後、講の仲間と飲食を共にしてから各自家に持ち帰って、自宅にて破魔矢として祀っている例が多い様です。

町内では、隣部落・蒲東の鎮西出雲大社の百手祭り(【別名】ハタハタ祭り・ハタハタかぶせ)が長い歴史を有しています。

【蒲東の鎮西出雲大社の百手祭りの資料がありましたので記します。】

四百有余年の古き時代から護り続けられる歴史的伝統行事で、天正16年(西暦1588年)、ときの戦火で焼け落ちた鎮西出雲大社を、

戦勝祈願のため太閤豊臣秀吉公が再建させたのを祝って始めたのが起こりだと伝えられています。

「悪魔祓い 福を招く」ことを祈願する鬼払いの行事で、竹編みに紙を張った直径2メートルの大的2個を供え、

その的の真ん中にカマドのススを油で練った墨で書いた【鬼】の字をめかけ、青竹の半弓で竹の矢をつがえ、射抜いて鬼を払い、

その大的を外に持ち出して、的のススをくっつけ合い、つかみ合ったり、ころんだり、顔じゅう真っ黒になりながらはしゃぐ祭りです。

別名「ハタハタ祭り」とも言われております。催されるのは毎年2月12日です。

県内では、毎年1月25日に行われる佐賀県神崎町横武地区の乙竜(おとりゅう)神社の百手祭りが有名です。

その他、佐賀市鍋島町上森田地区の八龍社で、同じ中森田地区では乙護法師社で、そして岸川地区でも同じように3月1日に百手祭りが

行われています。

県外では、長崎県諫早市破籠井(わりごい)【平家落人の里】の熊野神社(紀州の熊野権現の分霊社)が2月1日、

福岡県二丈町の淀川天神社が1月23日、高知県香南市夜須町の夜須八幡宮が1月21日、

同じ高知県の長岡郡大豊町桃源の熊野十二所神社が2月25日、兵庫県美方郡香住区御崎地区【平家落人の里】【平家かぶらとソバで有名】

の平内神社が1月28日、京都の上賀茂神社が1月16日、東京の明治神宮が1月10日、と開催日がまちまちです。

平家の守護神である熊野神社や平内神社等が出てくるのも興味深いものです。

【祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり……】の平家物語は誰もが知っているこの有名な文句で始まります。

平家一門の公達(きんたち・貴族の子弟)や武者たちが、壇ノ浦の戦いで力尽き、あるいは源氏に生け捕られるなどし、栄華を極めた平家の悲しい末路が

描かれています。物語の中では、命を絶つたとされる平家の武将たちが落ち延びて、人里離れた山間の秘境の地や孤島で細々と暮らしていたといわれる。

このような平家落人伝説の残る集落は全国各地(約150か所余りあるともいわれ、琵琶法師の影響で、仕立てられた村も存在するようです)にあります。

平家の落人の里での百手祭りは、平家の無念を晴らすとともに、士気を鼓舞し平家再興を夢見て受け継がれてきた伝統行事といえます。

その中で、小松部落の百手祭の1月20日と一致するのが、**宮島の厳島神社に併設されている大元神社(おおともじんじゃ)の百手祭**です。

厳島神社は平家固有(平清盛)の縁の深い神社です。もちろん小松神社の祭神として祀られている平重盛にとっても同様です。

小松神社(平家の神社)の本山(小松神社は神社登録をしていないので、正式なものではなくの意味)は厳島神社であり、大元神社と考えるのが妥当でしょう。

小松神社は、平安時代に平清盛(清盛の父)が管理し、平家の日宋貿易の拠点として栄えた神崎荘の中の平家の神社として建立されたもので

はなく、また出雲神社(町内の蒲田津)の子社でもありません。壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平家の落人たちが、小松の地に流れ着いて土着し、

源氏が滅んだ後、人徳の高かった小松内大臣・平重盛公を慕い、神社を建立し、心のよりどころとし、またこの地を重盛公の別名である小松の郷

(さと)と改めました。**小松神社の百手祭りは、平家落人の故郷である安芸の宮島の神事を伝承し、今日の祭りに至っている様です。**

大元神社(おおともじんじゃ)について記します

厳島神社の創始は、およそ1400年前、推古天皇の頃に、安芸の住人・佐伯鞍職(さえきのくらんど)が天皇に奏上して造ったと伝えられています。

その厳島神社に併設されている大元神社は、厳島神社よりも前に創建されたという伝承がある古社で、国常立尊(くにとこたのみこと)、

大山祇神(おおやまつみのかみ)、保食神(うけもちのかみ)、さらに厳島神社の初代神主・佐伯鞍職(さえきのくらんど)を祀り、宮島の地主神として

人々の信仰を集めてきました。

「大元尊」と呼ばれる六枚重三段葺きの屋根は、中世の絵巻物にみられるだけで、今日現存する唯一のもので、国の重要文化財に

指定されています。ここでは、毎年1月20日の午前11時から百手祭が行われています。厳島神社では百手祭りは行われておりません。

平清盛と安芸の宮島の厳島神社

平安時代末期、「平家にあらずんば人にあらず」とまでいわれた時代を築いた平氏の総帥平清盛は、宮島と最も縁の深い人物です。

久安2年(西暦1146年)に安芸守に任じられた平清盛は、瀬戸内海の制海権を手にすることで莫大な富を得ていました。

その清盛が安芸守だったころ、高野山の大塔の修復工事を請け負っていました。その修復工事がつつがなく終わり、高野山を訪れた清盛の前に、

白髪の老僧が現れます。僧侶は清盛に向かって、いま安芸の厳島神社が長く荒廃している、これを修復すれば官位があがり、他に並ぶ者が

居なくなるであろうと告げます。老人はかき消す様に姿を消したため、清盛はきっと弘法大師が現われたのだと考えます。

清盛は安芸守の任期を4年延長し、その間に厳島神社の再建を進めました。社殿を新たに起こし、鳥居を建て替えます。

海上に回廊を巡らすという荘厳華麗な海上社殿の姿になったのはこの時でした。

その後、清盛は京の文化や大阪四天王寺の舞楽を伝え、数々の美術工芸品や平家納経を奉納し、宮島を深く信仰します。

平重盛(別名:小松内大臣)は平清盛の嫡男。清盛の後継者と目されていたが、若くして病死(満41歳)。平家の良識派といわれた人材。

ここで疑問な点もできます。平家存続の失敗は、武士のことを忘れて貴族と同じような政治をしたこと(【武家政権でありながら、武士の要求を満たす政治ができなかった平家政権】【武士の武士による武士のための政権樹立を目指した鎌倉政権】)にあります。一番の失策は、平氏と源氏の朝廷内の勢力争いである平治の乱【平治元年(西暦1159年)】で、平清盛は天皇と上皇を救い出し、源義朝(頼朝の父)軍を打ち破り、鎌倉を指して落ち延びようとした義朝は捕らえられて殺害されますが、その子・頼朝は流罪、義経は京の鞍馬寺へ預けられました。この優しさが結果的には命取りになり、元暦2年(西暦1185年)源氏の大将・源義経が平氏を壇ノ浦においつめ、平家一門は滅びます。平家の世は、平治の乱から壇ノ浦の戦いまでとすれば、わずか26年と言うこととなります。これ(仇を討つ)を知る源氏は平家の壇ノ浦の残党を見逃すはずがありません(源氏の平家狩りは有名)。頼朝の目を逃れなければならない平家の残党が、どうして危険であろう平家とゆかりの深い神崎荘(荘園)内の蓮池(はずのいけ・法司奴一計)の地へ落ち延びてきたのでしょうか。当時北部九州における平家の勢力(大宰府・神崎荘・江上氏・原田氏等)は絶大であり、北部九州の諸豪族は殆ど平家の一族から恩恵を受けた家臣ばかりであったと言われています。大半が皇室や平氏に支配(有明海が生んだ海洋政権)されていた神崎荘で、当時日宋貿易の拠点であったと思われる蓮池(はずのいけ・法司奴一計)周辺の地を目的とした逃避行であったのでしょうか。八木蓮一氏の著書【私のふるさと小松村】では、「[文治元年(西暦1185年)壇ノ浦の海戦で大敗した平家の船団の中にいた建礼門院は3歳になられる安徳天皇を抱いて]【海の中にも都は御座います】と云って海中に身を投げられました。この船団の中にいた平資盛(たいらのすけもり:平重盛の子)の軍団の一部は女官3名、子供10名、付人86名、従卒37名の計136名の船団で平家の所領である九州へ向かって敗走した。」と詳しく調べて記載されておられました。引き続き追記します。「一説によれば九州の沿岸に寄港し、食料を補給しながら南下、筑後川の川口に達し、満ち潮のついで川をのぼり着いた処が現在の諸富津であった。上陸して北方を眺めると暗闇の中に一点の灯火をみつけた。暗い夜道を光を頼りに一同は歩き続けた。夜更けに着いた着いた処が蒲田郷の西部であった。一夜が明けて周囲を見ると西南は小高く、杉、松、楠の大木が繁茂していた蒲田郷の跡地であった。落人たちは、蒲田郷の人々の温情に援けられ城山を開墾し、食作物をつくり郷民とも融和し長い年月が過ぎ、【平重盛公】の孫たちも成長し、一族も600余名にもなったと伝えられています。その間に【平重盛公】の御恩徳を偲び小さな祠を建立し、お祀りしたのが小松社の起源です。」と記されておられます。